



巻 頭 言

期待される直播栽培研究

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事長 仲野博之
北海道支部

最近、十勝の畑作地帯をゆっくり廻る機会があった。「将来は夫婦で100haの畑作経営が夢」と言っていた意欲的な農家を思い出した。あれから10数年が経過したので、どれ程大きい経営になっているか楽しみに訪ねたが、彼は不運にも健康を害し、既に離農、転職していた。夢破れた彼の無念さを偲び乍らも、こういう形の離農のあることを認識した。

センサスによると、5年前の平成2年に比べ農家戸数の減少率は全国では10.4%だが、北海道の場合15.1%とかなり高い。また10ha未満の農家の減少率は25%台であるが50ha以上の農家数は逆に30%増加し、規模拡大は確実に進行している。とは言っても十勝の代表的な畑作農家の経営規模は未だ35ha内外に過ぎない。勿論、最近急増している法人化では100ha以上の経営もあるが個別経営で100haというのは極めて少ない。輪作作物の中で労力のかかり過ぎる作物があり、うまく輪作を組めないためである。

農家の高齢化が進み4人に1人は高令者と言われ、今後も農家戸数の減少は加速されるばかりであろう。離農で残された畑や水田を誰が、どう管理するのが問題である。コントラクター方式など種々あろうが、矢張り残った農家が大規模省力化で対応するのが最も良いのではないか。

十勝の畑作4品の内、省力化の足を引張っているのは豆とてん菜である。

てん菜は直播栽培から移植栽培に殆んど移行したが、なお1,500haほどの直播が残り、最近増加傾向にある。勿論、省力が魅力で若干の減収は無視できるからである。即ち、10アール当

りの労働時間は移植の60%、12時間内外で済む。中には無間引栽培で6.6時間、収量もほぼ移植並という事例もある。この程度であると自家労力だけで20ha位のてん菜の作付は可能となる。

しかし直播栽培には発芽の不安定性、霜害、風害、低収性などの問題点がある。また直播では充分安心して使用できる除草剤がないという面もある。これらについては道立農試で経営的評価も含めて研究が進められているのでその成果が大いに期待される。

豆類では除草が問題である。除草剤の土壌処理は行なうが、特に初期生育の悪い小豆では2回の手取除草を行ない、全労働時間の60%、7.8時間を要している。土壌処理剤と最近の効率的なカルチの組合せで手取の排除はできそうであり、大幅な省力化が期待できる。

一方、稲作でも国、県共に直播研究に積極的に取組みを開始した。福島県では本年2,000haの直播を目標にしているそうである。また韓国では全作付の40%を直播にと研究が進められていると聞く。

北海道の直播向品種の育種では既に2品種を出しているが、食味の点でまだ不十分である。しかし、低温発芽性の中間母本もできたので、今後育種効率が高まるであろう。

栽培研究では苗立性の確保のために水の保温効果にこだわってきた感があるが、最近の湛水播種、落水出芽方式が予期以上の苗立性を示し倒伏性の向上も期待できるので楽しみである。

いづれにしろ、今後の大規模省力栽培には直播研究が不可欠で各方面からの積極的な支援が必要と思われる。